

## V 妊産婦死亡の疫学的研究と対策

弘前大学医学部産婦人科教室

品川 信良

### 研究の目的

わが国においても近年、妊産婦死亡は幸い非常に減少している。しかしながら、実際に減少したのは、比較的緩慢な経過をとって悪化し死亡していく症例で、「急死」又は「突然死」とでも称すべきものは、あまり減少していない。特に、急死例のなかには、解剖によって、妊娠中は気づかれずにいた意外な合併症の発見されることがあるほか、病理組織学的に更に検討を要する点がまだある。また、これからの母子対策は、急激に容態が悪化していく場合にこそ対応していかなければならない。

一方、近年の進歩した医療による妊産婦死亡の減少や実態が、救急医療システムに恵まれた医療機関と、僻地や離島などを代表とする地区でどのようになっているかを知ることは、今後の母子行政に重要な資料となる。

これらの問題を検討するため、以下の研究を行った。

### 研究の結果

#### 1. 妊産婦死亡剖検例における臨床診断と剖検診断の一致率（調査材料と方法）

日本病理剖検輯報の第8輯～18輯（昭和42～52年）に集録されている剖検例241,114例の中から419例の妊産婦死亡例をピックアップして、これらについて、臨床診断を剖検診断とを対比してみた。

419例における「正診率」ないしは剖検診断と臨床診断の一致率は52.0%にすぎなかった。

直接死亡例（direct obstetric deaths）の324例における「正診率」は49.7%であった。その直接死亡例の324例を剖検診断別に正診率を検討してみると、妊娠中毒症76.3%、産褥熱・敗血症40.0%、子宮外妊娠53.3%、分娩時の失血死（出血死）38.5%、等であった。なお、解離性大動脈瘤破裂では正診率0%、剖検しても「原因不明の急死」とするしかしようなものがないものが20例も含まれていた。

#### 2. 妊産婦死亡剖検例に関する病理学的検討

弘前大学においては、これまでに54症例を蒐集したが、その内訳は、出血死22例、子宮外妊娠20例、妊娠中毒症5例、産褥熱2例、流産後の出血死1例、羊水栓塞1例、間接死亡例（indirect obstetric deaths）3例である。

#### 3. いわゆる里帰り分娩についての社会医学的考察

青森県下の医療機関が最近（昭和50～51年）取扱っている分娩の7～8%は、いわゆる「里帰り」である。程度の差はあっても、この傾向は全国的なものであるらしい。近代産科学的な立場にたった場合、里帰り分娩法が望ましいものではないことは言うまでもない。社会的家庭的にみた場合でも問題がある。

特に見逃しがたいことは、里帰り分娩群には、周産期死亡、骨盤位分娩、帝王切開などが対象群に比べ各々2.4倍、1.4倍、1.9倍と、高頻度の値を示していたことである。

#### 4. 実態調査結果

##### 1) 妊産婦死亡

本土・離島とともに年々減少傾向にあり、本土では、ほぼ全国平均に近くなったが離島においては、

なお高率である。

## 2) 死亡原因

大部分を占めているのは出血、妊娠中毒症および、これらに起因するものである。本土・離島別では出血による死亡が離島で異常に高い。

## 3) 死亡年齢

35才以上の高年妊産婦において高率であり、とくに離島において著明である。

## 4) 死亡時期

産褥時における死亡が大部分を占めている離島では約78%, 本土では約64%であった。

## 5) 死亡場所

死亡場所はほとんどが病院、診療所であるが、自宅での死亡例もみられる。

## 6) 分娩場所及び分娩助者

病院、診療所における施設分娩が主であるが、離島においては今なお自宅分娩が本土にくらべ、高率である。分娩助者は当然医師が大部分を占めているが、離島では助産婦による介助がやや多い傾向を示した。

## 7) 医療環境

やはり離島においては専門医が少なく、また専門医が一人もいない島が存在することも本県の実情である。

## 5. 産科における急性DICの診断基準

昭和37年以降の弘前大学、秋田大学およびその関連病院における産科急性DIC75例につき詳細な検討を行い、診断基準を作成した。その結果、

- 1) DICを伴いやすい基礎疾患が存在すること。
- 2) 基礎疾患の個々の症状に加えて、出血傾向などのDICを疑わせる臨床症状がある。
- 3) 以上に加え、赤沈の遅延、出血時間の延長があれば、臨床的にDICとしてよい。
- 4) さらに以上の他、DICと確診すべき、臨床検査項目とその基準。

などを明かにした。

これらの結果は、実施臨床上、極めて役に立つ指針であると考えられる。

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

### 研究の目的

わが国においても近年、妊産婦死亡は幸い非常に減少している。しかしながら、実際に減少したのは、比較的緩慢な経過をとって悪化し死亡していく症例で、「急死」又は「突然死」とでも称すべきものは、あまり減少していない。特に、急死例のなかには、解剖によって、妊娠中は気づかれずにいた意外な合併症の発見されることがあるほか、病理組織学的に更に検討を要する点がまだある。また、これからの母子対策は、急激に容態が悪化していく場合にこそ対応していかなばならない。